

盲目な者たち

列王記下1：1～4

マルコ3：20～35

2021年になりましたが、昨年暮れより、首都圏ではコロナ感染者が急増したため、先日再び緊急事態宣言が発令されました。このことを受けて、当教会の長老会では、公の礼拝を閉じることとして、主日においては牧師二人で礼拝を守り、それをオンラインで送信するということとなりました。もし可能ならば、これを利用して、ご自宅で時間に合わせてそれぞれが礼拝をお献げしていただければと願っている次第です。本来集会というのは、時と場所を共有することが基本ですが、このような状況ですので場所は共有できませんが、時を合わせることはできることを有り難く思っています。ただこれに甘んじることなく、一刻も早く本来の礼拝やその他の集会を開くことができるように祈り続けたいと思います。一応このオンラインでの礼拝の送信は緊急事態宣言が解除されるまでの予定であり、2月7日までとなっていますが、それがいつになるかは、よくわかりません。その間どうぞこのメディアを通して、共に信仰を培っていきましょう。

イエス様が12弟子を選びよいよ本格的に宣教活動に入っていました。イエス様の力あるお言葉と御業は人々をひきつけました。イエス様が家に戻ってお休みになろうとしても、群衆はそこまで追いかけてきました。そこで弟子たちも共に食事をする暇も、場所もなかったのでしょう。イエス様の活動を人伝えに聴いた身内の人たちは、一体どうしたのだろう、これは普通じゃないと思って、とりあえずイエス様を引き戻そうとしたのです。21節後半には『あの男は気が変になっている』と言われていたからである。」とありますが、ここでは人々のうわさをしていたということです。しかし最近出ました聖書協会訳を見ますと『気が変になっている』と思ったからである。」とありまして、「気が変になっている」と思ったり言ったのは身内の人たちだということになります。いずれにしても、身内の人も他の人々も、イエス様が普通ではないと思ったことかもしれません。ただエルサレムから来た律法学者たちは違いました。彼らはわざわざエルサレムから地方のガリラヤまで下って来たのですが、それはおそらく、イエス様のうわさを聞いて、一体どんなものなのかと調べに来たのでしょう。彼らはイエス様のことを「ベルゼブルに取りつかれている」とか、「悪霊の力で悪霊を追い出している」と言いました。つまり、群衆や身内の人は、イエス様は普通ではないぞ、ぐらいの評価であり、そこに尋常ではないことを見たのですが、律法学者たちは、イエス様を悪魔の頭であり、悪霊の力でやっていると言ったのでした。イエス様の力は聖霊の働きによるものなのでありますが、それを悪霊としているのです。イエス様を神の子として証している聖霊の働きを拒否するところか、悪霊だと言っています。聖霊を冒瀆しているのです。ですから、イエス様は聖霊を冒瀆する者は永遠に赦されないとされたのです。

身内の人たちがイエス様を「気が変になっている」と思って取り押さえようとしたことも赦される。呪いの言葉さえしながら、イエス様を知らないと言ったペテロも赦されました。なぜならば、赦してくださる神様の愛を受け入れたからでした。しかし、あなたたちの言動は赦されることはないのだ、と律法学者に向けられた厳しいお言葉は、イエス様の神的な権威を知っていながらも悪霊として決めつけている高慢さ、神様の愛を受け入れようとしない閉ざされた心があるから赦されることができないのです。

弟子たちだけでなく、私たちが弱さを持っていますので、ある時は神さまから心が離れそうになったり、信仰的にも理解できないことに疑いを持ったり苦しんだりすることがあります。しかしそれらは赦される範囲内にあるのです。しかし、イエス・キリストが霊的な方であるのを感じていながらも、畏れをもって真剣に考えるより、自分たちの立場を守るために、高慢な心で悪霊だとイエス様を拒否してしまうならば、救われることがないのです。私たちの頑なな心はしばしばイエス様に対して不従順になります。いつもイエス様をすべてお迎えできるような心根ではないのです。それは私どもの心の底に深い罪があり、また生きるということがそのエゴイズムの罪のうちで生きているということに他ならないからです。イエス様ははっきり言われています「人の子らが犯す罪やどんな冒瀆の言葉も赦される」と。つまりそのような自分を悲しむ者は幸いで赦されるのです。

しかし、律法学者のようにイエス様が神の子であると聖霊が証しておられるのにもかかわらず、否定する者は聖霊を汚すことで、赦されないのです。

身内の人たちはイエス様が幼い頃からずっとそばにいたのに、正体に気づけなかったのです。身内として心配をしていたが、それはかえってイエス様のお働きを邪魔することになってしまうのです。イエス様は人々に問いかけます「わたしの母、私の兄弟とは誰か」と。人々は思ったことでしょう、それは親や兄弟、血肉のつながりの人で、今イエス様を心配して呼びに来た人であると思ったでしょう。しかしイエス様の答えは違うのです。イエス様の母、兄弟とは血縁関係ではない。イエス様に従い、神の国を受け入れ、イエス様と共に生きる人なのです。イエス様は「神の御心を行う人こそ、私の兄弟、姉妹、また母なのだ」と言われています。つまり聴くだけでなく行う人であるということです。神のみ心はイエス様の思いでもあります、イエス様をこの世に遣わせた父なる神様の御心でもあります。イエス様の父なる神様も、子であるイエス様のお心も同じです。それはこの世の人たちを救おうとされているということです。その救いに応えて従う人、それこそ、神のみ心を行う人です。

身内の人はその人の幸せを願い、良い人生が歩めるように願い、支えようとします。イエス・キリストの人生の歩み、目的は父なる神様のみ旨を遂行することです。イエス様はそれを自覚されており、それを全うすることがご自身の生き方であると認識されていました。ですからその生き方に、従う者がイエス様の身内であるのです。イエス様を信じる信仰によって、イエス様の兄弟姉妹とされることにより、私どもキリスト者は互いに兄弟姉妹となるのです。教会が単なる人間愛や博愛精神でもって兄弟姉妹と呼び合うのではないのです。一人一人がまずイエス様に繋がり、そのことを通して神の子とされることにより、私たちは互いに兄弟姉妹となったのです。

長年連れ添った肉親が身内ではなく、むしろであったばかりの弟子たちが身内となる。イエス様の性格や癖などについては肉親のほうがよく知っていたはずではなかったでしょうか。それなのにまだイエス様のことを良く知らない弟子たちがより近い存在となったのです。また本来ならば、宗教分野においては律法学者がエキスパートであるにもかかわらず、彼らではなく、イエス様に従っていったのは群衆のうちから出た素人集団であったのです。もちろんイエス様の死後にはパウロのような高度な宗教教育を受けた者もいましたが、やはり当時の既存の権威を得ていたものは、回心が難しかったこともあったであろうと思われます。

イエス様の母、兄弟たちは、イエス様に対して盲目ではありましたが、イエス様の全存在を否定しようとは思いませんでした。理解できなかつたが、愛していた、しかしそれに対して律法学者やファリサイ派の人たちはイエス様の人格だけではなく、霊的な権威を全面的に否定し、悪霊だと決めつけてしまったのです。自分が神様になっています。本当に盲目な者たちであったのです。

イエス様を信じて神の家族になること、そして互いに兄弟姉妹になることは、お互いに深く知らなければならぬことで成り立つことでもないですし、学殖を身に着け、稼ぐことによって、あるいは社会的地位によってなることではないのです。ただ真心からイエス様を救い主であると信じて従うことによりキリストに繋がらせていただいているのです。神様の御心を行う者として認めてくださったのです。そして、そのように神様の御心を行わせてくださったのは聖霊の力でした。聖霊こそ神様と私たちをつないでくださる紐帯のようなものです。そしてわたしたちは天の父なる神様とはただイエス・キリストを通してのみ繋がっているのです。それ以外の接点はないのです。神の家族にされるのには、またイエス・キリストの兄弟姉妹になるには、聖霊の力に身をゆだね、イエス・キリストと共に生きることです。

私たちがイエス様によって集められ、主の御手のうちで共に兄弟姉妹になっていることに感謝しましょう。イエス様が望んでおられること、そして父なる神様の御心は、私どもが真の救い主を信じて、どのようなことがあってもその御手のうちに留まり、主にある兄弟姉妹として支え合いながら、主に従っていくことです。